部落解放子ども会

1　少年少女水平社（解放子ども会の歌参照）

1922（大正11）年に生まれた全国水平社の創立を期に、その翌年には少年・少女水平社が生まれ、民衆の立場からの子ども会組織が作られ、やがて全国少年少女水平社として全国的な活動が展開された。

長野県では、1926（大正15）年、南佐久の佐久水平社の執行委員であった高橋修峰（秀峰）により組織された少年少女水平社が先駆けであろう。少年少女水平社は、毎月３～４回ずつ集まり学習会などを開くなど、自主的な組織として活動した。しかし、1937（昭和12）年の日中戦争を契機に大きく戦時体制に組み込まれていった。そして、それに伴い、少年少女水平社活動も衰退していくことになる。

2　解放子ども会の前身

解放子ども会の前身としての子ども会活動は、戦後の混乱期における、学用品や教科書もない子どもたちの状況を改善しようと、被差別部落の青年等が自宅を開放して子ども達を集め学習会を始めたことが契機となっている。

佐久（五郎兵衛新田村）では、1950（昭和25）年、子どもたちの状況を見かね、自宅を開放して学習会を行った。国語を中心とした毎夜１時間の学習会であった。いわば一人の被差別部落の青年が、自発的に手弁当で始めた活動であった。1956（昭和31）年になると、共同作業所が建設され、子ども会もそこで行われるようになっていく。ここへは、春休みや夏休みになると、慶応や早稲田の学生なども応援に来るようになり、子ども会を育てようという輪も広がりを見せていった。さらに1961（昭和36）年、長野県では小諸に次ぐ２番目に建設された隣保館へ会場も移り、活動は継続された。

また、**長野市（Ｍ地区）**では、1958（昭和33）年頃から子ども会活動が「**Ｓ区**学習会」として始まった。当時Ｓには、高校に進学できず中卒で日雇い労働に従事していたり、一度は県外に出ながら差別を受けて故郷に帰ってきていた青年が大勢いた。彼らが、「自分たちはろくに勉強ができなかった。せめて子どもたちのために学習会を行い一緒に学習をしよう。」と公民館に申し出た。小学校も協力し、「**Ｓ区**学習会」が発足した。運営には様々な壁があったが、学校の先生も無償で指導に入り、定期的な学習会が行われるようになった。

3　解放子ども会として

このように、当初は子ども達の基礎学力を少しでも向上させようというねらいで始まった学習会が、部落差別の問題も学ぶようになり、名称も「部落解放子ども会」となっていった。子ども会の指導は、1974（昭和49）年から配属された「同和教育推進教員」を核として部落解放を目指す子ども会活動が推進されるようになっていった。

〔ルポ現代の被差別部落、あけぼの資料編参〕